

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	法科志望者の責任（懸賞文）
Author(s)	古庄，逸夫
Citation	龍南會雜誌， 1 5 9： 2 7 - 3 1
Issue date	1915-12-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6523
Right	

と云ふことを認めねばならない。或る時代が全体として悉く誤謬の中に在ると云ふ事はどうしても信じ得べからざる事である。吾々の努力と言ふもかるが故に必要である。ある時代は幾多の缺陷と誤謬とを持つて居るが吾々の理想は無限に湧いて来る。自分は現代の功利的傾向を眺めて力強く此の感に打たれたのである。繰り返す「世の中に唯つた一つの勇氣がある。夫はあるがまゝに人世を見て——そして夫を愛する事である」自分は少くとも現代を忠實に見てそしてそれを愛して居るものゝ一人であると思つて居る

(十月四日稿)

(完)

法科志望者の責任

(懸賞文)

法 三 古 庄 逸 夫

嗚呼危険なる哉、國家の將來。嗚呼憂ふべき哉、國運の前途。天下滔々乎として私利を計るに汲々とし、朝に權門に腰を屈し、夕に黄金の前に節を折り、武將命を惜み、文臣錢を愛し、本能の満足を求めて、刹那の淫樂に耽り、藝術の假面を冠して、醜惡なる痴態を演じ、政治家は爵位勳等を求むるに急にして、濟世救民の大業を捨てゝ顧みず。宗教家は虚偽淺薄の信仰を高唱し、讚仰すと雖、濶濶たる靈的欣求を満す能はず。教育家は國民道德を講ずと雖、沛然たる個人主義の主張に拮抗する能はず。世を舉げて、精神的瓦解の淵に沈淪し、吾人生活の根本義たる國家の運命や、人格の修養や、之を措いて説く者なく、先憂後樂の志士、遂に求むるによしなし。止んぬる哉。

回顧す。五十年の昔、國運陵夷し、社稷覆滅せんとするや、尊王慷慨の士、雲の如くに輩出し、艱難に撓

まず、威武に屈せず、大中至正の誠を振起して、或は「止むに止まれぬ大和魂」のために一身を捨てゝ願ふす。或は「赤心を櫻島山の煙」に比し、或は「二十五回刀水を渡り」、千辛萬苦の結果、回天の偉業は成就し、維新の皇謨は恢弘せられたり。人は云ふ、大正第二の維新と。しかも、犠牲的精神の宇内に磅礴し、六合を照輝し、以つて吾人をして、欽仰措く能はざらしむるもの有ることなく、轉々昨是今非の歎を發せざるを得ざるを如何せんや。方今世俗の凡物は、桃源の春夢、徒に圓かにして、酔へるが如く、眠るが如く、少しく、醒めたる者は、唯だ死人の如く、黙して語らず、酔へる者は、胡蝶の如くに亂舞して、日の暮るゝを知らず。融々たる太平の氣、四海に溢るゝが如きも、胸臆を敲けば、世道人心の敗類、遂に之を救濟するに道なからんとす。人有り、深夜韓非を讀み、悶々たる孤憤を發せざるを得ず。嗚呼悲哉。

現代青年は、現代社會の產物なり。故に、時代思潮を離れては、青年の真相を闡明する能はず。惟ふに、激烈なる生存競争の結果は、少數の成功者の、白馬金鞍酒池肉林の榮華を肆にする裏面には、多數の悲惨なる劣敗者は、空しく陋巷に呻吟せざるを得ず。加之經濟上の大變動は、社會的革命を醸生し、驚くべき科學の進歩は、世運の進展をして、應接に遑あらざらしむ。此の急激奔騰の時流に處して、能く一身の獨立を計り、頭角を露はさんがためには、すべての人間と階級とを利用して、己の榮達を計り、口腹の満足を得るの、簡明なるに若くはなし。かるが故に、甘きを集る蟻の如く、天下の青年が、争うて、富豪の駟馬となり、權勢の奴隸となり、公義を顧みず、私情を纏綿せしめ、こゝに所謂閑なるものを構成し、以つて一身の温袍に汲々たり。かるが故に、彼等一度政治家となれば、唯々顯要の地位に據り、朋黨比周して、放僻邪曲到らざるなく、その胸底、何等國家的經綸を抱かず。新聞記者となれば、社會の木鐸たる天職を忘れて、民衆に媚び、俗

世に阿り、春秋の論法をやるに椽大之筆を以つてする能はず。辯護士となれば、民權を擁護し、民福を増進すべき、職責を捨て、奸譎巧詐、齊東野人を欺瞞して、その膏血を絞るに之れ日も足らず。司法官となれば、峻嚴不可侵の眞骨頭を忘れ、敢へて、行政權の掣肘をうけ、獨立不羈の裁判を行ふ能はず。外交官となれば、國利の進展よりも、國是の遂行よりも、却つて西洋人の一擧一笑に苦惱して、舞蹈の妙技を競ひ、夜會の花形たるの外、能なし。實に、現代の青年が、志士の眞骨頭を没却し、無氣力無節操となるが如きは、主として、現代社會の缺陷に由らずんば非ざる也。

道ふことを止めよ。現代の日本は、腐敗せりと。説くことを止めよ。現代の社會は、精神的瓦解の境遇にありと。凡そ物窮すれば通じ、又泥中玉あるの理なからんや。吾人は、天下の青年、殊にその優秀なる部分を占め、國家に對する責任の、最重大なる法科志望者が、この際、猛省一番、憤慨蹶起、驚天動地の大勇猛心を振起し、天民の先覺となり、七生報國の大熱情を發し、狂瀾を既倒にかへす底の、大努力をなさんことを、切望せざるを得ず。仰いで、新緑の鬱蒼たるを見よ。伏して芳草の非々たるを見よ。自然の景象は、人事の躍動をそよらざるはなし。努むべき哉。勵むべき哉。

然も吾人が、此の對國家的責任を全うし、蹇々の誠を、輸さんかためには、吾人は、正に其の理想實現の手段を、講究せざるべからず。これ法科志望者、緊急頭上の、大問題たらんばあらず。抑々吾人が、大和民族の獨立自存の對策として、高唱する第一義は、實に皇室中心主義に存す。元より、吾人は、人格の價值を尊重し、社會の改革を計るの點に於ては、敢へて人後におちずと雖、凡そこれ等の主義は、根本精神たる皇室中心主義に、包容せられずんばあらず。此の主義や、廣大無邊にして、吾人にとりては、實に唯一の宗

教的信念とも云ふべき、絶對的價値を有するもの也。皇室は實に、民族的本源にして、社會的根幹たり、又政治的中心にて御座すなり。吾人一度、此の主義を奉じて起つ、大和民族六千萬同胞の團結や、實に堅きこと百鍊の鐵の如く、國家の休戚、一にかゝりて此の主義に存す。若し夫れ、此の主義を、經世的手腕を以つて、政治的方面に利導せんか、憲政有終の美となり、自治團體の健全なる發達となり、野に無告の窮民なく、民に塗炭の痛苦なからん。更に進んで、秋霜烈日の大意氣を以つて、之を外交上に振起せんか、帝國は東亞の盟主となり、國威中外に發揚し、國力隆々として發展し、その前途誠に洋々春海の如く、その國運は實に泰山富岳の安きに座せん耶。

夫れ然り。然りと雖、一度首を回らして、吾人の脚下を顧みるに、方今我が法科學生は、その稜々たる氣骨を缺ぎ、徒に輕薄皮相なる、新思潮に耽溺して、その求むる所、阿堵物に非ざれば權勢たり。その望む所勳爵に非ずんば、唯一片の稱號たり。試みに思へ。近時、世論に喧しき學制改革の如き、如何なる巧辯辭を以つて、之を糊塗修飾するも、更に一膜をはいで、その根本を洗れ來れば、その希ふ所は、成るべく身心の勞を避けて、修業年限を短縮し、官私兩大學の平等待遇を求め、學士號を得んとするにあり。之を深思し、之を熟慮し來りて、吾人は、その内容の貧弱無比なるに一驚を喫し、その理想の絶無なるに、慄然たらざるを得ず。之と等しく、既往の帝大亦、徒に官僚の養成所となり、學閥の巢窟となりて、彼のフヒテが伯林大學に於けるが如き、國民的理想の薰陶所に非ず。夫れ帝大既に斯の如し。遂に志士の眞骨頭ある、濟々多士の輩出せざるや明なり。然れども、倏忽變轉端睨すべからざる、國際政局の上に、吾人が國家の發展を計らんがためには、帝大は、單に學術の蘊奧を究むるに止まらず、進んで、國民的大精神の養成に、努力す

る所なからざるべからず。

今や世界の戦亂は、一年を經過して、遂に一進一退、底止する所を知らず。我が帝國は、幸いにして、その動亂の中心より、遠ざかれるも、近時屢ば報じ來る、露國の敗軍の如き、その影響する處、果して如何。此の戦亂終局の際に於て、世界の地圖がその色彩を一變せんとするは、之を逆賭するに難からず。而して、戦後の角逐は、更に一層の活氣を帯び、堂々として、吾が對岸の隣邦に於て、演ぜられ、之れがため、我が國運が、倍奮の危殆に瀕すべきは、識者を待たずして明也。此の時に際して、即位の大典は、舉行せられんとし、又我が廟堂の爲政者は、日比谷原頭過半數の味方を獲て、國內稍や小康を保てり。これ正に、國民の全精力を傾倒して、協心同力、東亞の風雲を一掃し、國力の進展を企圖すべき、千秋の機會たらずんばならず。吾人殘燈耿々たるの下、萬籟眠る沈靜の裡、獨り破机に向ひ、肅然端座、襟を正うして、帝國將來の好運を默禱し、象山の絶句を誦せずんばならず。曰く、「殷々闐々在遠空。密雲不雨日沈紅。雷公在意蘇天下。只向山中起蟄龍」と。

御民われ生けるしあり天地の

榮ゆる時に逢へらく思へば

海 犬 養 岡 磨

君の爲め民のためぞ思はずば

雪も螢もなにか集めむ

大 納 言 師 兼